
とある科学の未来知覚

Y B F

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の未来知覚

【Nコード】

N4261Y

【作者名】

YBF

【あらすじ】

学園都市。そこには外部より発達した技術力と超能力があった。そんな場所で、少年 碓野和讀は治安維持組織『風紀委員』の一人として、学園都市を東奔西走する。規律を遵守しながらも己の志を貫くために、日々を過ごす彼の目に映る未来は何なのか。この物語は、そんな風紀委員である彼の日常と戦闘（と、時々恋愛）を描く。

独自設定等＜随時更新・ネタバレアリ＞（前書き）

本作における独自設定の説明です。

随時更新していくため、ネタバレ要素も含まれる恐れがあります。
先に本編を読むことをオススメします。

また、言葉の並びは本編での登場順となっています。

独自設定等＜随時更新・ネタバレアリ＞

柵川中学

学校名

正式名称は第七学区立柵川中学校。平々凡々な学園都市外にも見られがちな中学の形式。

超能力のカリキュラムはあるものの、優れた超能力者は特にない。

生徒のほとんどが無能力者であり、弱能力者であってもこの学校では上位となる。

さきみかずよみ
碓巳和讀

人物名

（一応）本作の主人公。柵川中学に通う風紀委員。能力は『未来知覚』で弱能力者。

身体能力の高さから鎮圧においては弱能力者でありながら多方面から高く評価されている。

フューチャーヴィジョン

未来知覚

超能力

未来に起こりうる出来事を予測演算し、能力者自身にその未来を見せる能力。

この能力で見えた未来は他人に見せられない。
そのため、この能力の発動を証明するのはAIM拡散力場のみである。

この能力における強度の区分は以下の通り。

しかし、現存する最高強度は異能力者どまり。

無能力者……数瞬後を予測演算する、あるいは意識的に発動できないものの数秒後を予測演算する。

弱能力者……数秒後を予測演算し、数瞬後に限り俯瞰的に予測演算できる。

異能力者……数分後を予測演算し、数秒後に限り俯瞰的に予測演算できる。

強能力者……数時間後を予測演算し、数分後に限り俯瞰的に予測演算できる。

大能力者……数日後を予測演算し、数時間後に限り俯瞰的に予測演算できる。

超能力者……樹形図の設計者級の予測演算能力を持つ

ジャッジメント

風紀委員

組織

主に校内での治安維持活動をする、生徒で構成された警察的組織。内部腐敗を防ぐために同目的の組織である警備員とは別系統の組織となっている。

校外での治安維持活動は正当防衛を除き禁止。

そのため、校外での過剰な鎮圧活動には罰則が科せられるようになっている。

稲井咲美
い ない さ く み

人物名

和讀の同僚。風紀委員として監視カメラ係を務めている女子生徒。根気強さが取り柄。

知識がオタク系統に偏っているからか、大体の事がオタク的に解釈される。

アンチスキル

警備員

組織

主に校外での治安維持活動をする、教師で構成された警察的組織。内部腐敗を防ぐために同目的の組織である風紀委員とは別系統の

組織となっている。

勤務時間の長い教師で構成されているため、対応の遅さに問題がある。

事件を未然に防げない、という事もあり治安悪化の原因を作っているとも言える。

スキルアウト

武装無能力者集団

集団・組織

一般には、あらゆる理由で不良となった無能力者たちのことを指す。

原則として武装した者を指すのだが、そういった者は稀であり、不良の代名詞となっている。

様々な組織があり、武装無能力者集団同士での闘争もあるらしい。

01：無償奉仕（前書き）

見切り発車。

それどころか定期更新で見込みもないのにスタートと言う謎な状況での開始となります。

それでも読んでみる、という人は本編をどうぞ。

01：無償奉仕

一瞬、視界にノイズが走る。

頭の中ではザザツという不快な音が一瞬間こえ、視界が一つ増える。広がるのではなく、増える。

一つは現実。

実際に目の前で起こっている現在の出来事。

もう一つは

「くそ、なんで当たらないんだ!？」

目の前の不良は憤怒の表情で彼に迫ってくるが、彼にとってはそんなものは脅威にすらならない。

右・左と繰り返され、時には右・右・左や左・右・右など時折攻撃パターンを変えてなんとしても彼にパンチをくらわそうとしているようだが、そんなのは彼には無意味だ。

「そろそろ静かにしてくれないか？ 僕はそろそろ休みたいんだよ」

「う、うるせえっ！ そんな事はさせ」

「まあ、許可がなくても鎮圧するんだけどね」

最後まで言わせない。

有無を言わず彼はクロスカウンターで右ストレートを不良の左頬をぶちかます。

だが、その直後。

パンチは突如軌道を変え、アッパーの形で不良の顎にクリティカルヒットする。

深く入ったのか、不良はよろけるどころか少し上に吹っ飛び、倒れた。その不良の顔には「どうして、気づいた？」と書かれているようにも見えた。

それに答えるように彼は口を開く。

「まあ、見えていれば、こうなるよね　さて、と。柵川中学三年組　。恐喝の容疑で確保させてもらうぞ」

そうして、彼は簡易手錠を不良に着け、額に浮かぶ僅かな汗を手で拭ったのだった。

彼に見えているもう一つの視界。

そこには、左ストレートを仕掛けた不良が、彼に対し右アッパーを用意しているというものだった。

それが見えたからこそ、彼は咄嗟に攻撃を避け、止めを刺すことができたのだ。

レベル1
弱能力者でありながら鎮庄においては無類の強さを誇る、柵川中学に通う風紀委員。ジャッジメント

おきみ かずよみ
碯巳和讀。

フューチャーヴィジョン
能力名・未来知覚。

とある魔術の禁書目録・とある科学の超電磁砲　二次創作小説

とある科学の未来知覚
フューチャーヴィジョン

01：無償奉仕

校内での治安維持活動（と、いう名のカツアゲをしている生徒の制裁）を終えた和讀は、気だるそうに柵川中学内にある風紀委員の詰め所に戻っていた。

「……たく、僕は面倒が嫌いだったのに」

「そう言いながら注文通りに鎮圧する和讀ってさ、ツンデレだったりするわけ？」

和讀に対しそんな事を言ったのは、彼と同じく柵川中学の風紀委員、いないさくみ稲井咲美。

校内で実際に治安維持活動を行っている彼とは違い事務担当であり、校内の治安を維持するために最終下校時間まで監視カメラの映像と睨めっこを続けるなかなか根気強い少女である。

風紀委員である以上、彼女も真面目な生徒であるのは間違いない。しかし、どうも知識がオタク系統に偏っているのか、何でもかんでもそちらに変換して物事を考える事が多い彼女に和讀は苦手意識を覚えていた。

「男のツンデレとか気持ち悪いだけだろ。普通に考えて。そもそも、女子のツンデレにしたって、冷静に考えればかなりイラってくるよ？」

「何を言っている碕巳軍曹！ ツンデレとは萌えの極みなのだぞ！」

「おい、そこ少し落ち着けて」

「アタシは落ち着いているぞ軍曹！」

「ダメだこりゃ」

すっかり話を通じなくなつた咲美を和讀は無視して、時計を見る。最終下校時刻は午後六時。現在の時刻は午後六時十五分。完全に最終下校時刻を過ぎていた。

「おい、稲井。最終下校時刻過ぎてるんだけど」

「そもそも、ツンデレというのは　って、え？　最終下校時刻？　……げ。本当だ」

「ったく。時計くらい確認してくれ。……と、いうわけで時計を見てなかったお前が戸締りしてくれよ」

「えー」

「えー、じゃない。そもそも俺は校内の治安維持活動をした帰りだぞ。少し位ラクをさせてよ」

「……う。それを言われると申し訳ない。わかつたわよ。戸締りしとくよ」

「任せた」

そう言つて、和讀は先に詰め所を後にした。

季節は初夏。時折降る雨の湿気が鬱陶しく感じられる季節。湿度の高さに和讀は少々イライラしながら、午後六時ながら少し明るい空を見上げていた。

「……今日も仕事終わり、と」

風紀委員としての仕事を終えた瞬間、というのは彼にとって至福の瞬間であつた。

そもそも、彼はもともと風紀委員が校外でも治安維持活動をするのだと思つて風紀委員を志した人間である。

しかし、風紀委員の活動は原則としては校内での治安維持活動に制限されていたのだ。

本来の志とは違う仕事にうんざりしている和讀にとっては、仕事が終わつた瞬間こそが彼にとっての至福の瞬間であるのは当然の事なのだ。

「……はあ、それにしても……」

和讀は空に向けていた意識を地上へと戻す。

「最近、校外活動をする風紀委員が増えているよな……」

そうなった原因となると、和讀は一つ思い当たる節があった。

スキルアウト
武装無能力集団の台頭。

本来であれば“武装”とは名ばかりで、ただの不良の集まりである事の多い武装無能力集団の中に、ついに本格的な武装をする者たちが現れた事である。

勿論、その集団は武装無能力集団の少数派であり、そこまでの規模を持つている集団の活動は計画的で慎重なのだが、そういった本格派の台頭から、ただの不良の集まりが活発に動くようになったのだ。

不良といえど、此処は学園都市。

能力者のいる此処では能力者に対応すべく、学園都市外の不良の身体能力も向上しているのだ。

身体能力でどうにかできる問題だけではないのは確かだが、能力者の弱点をつくために不登校の生徒とは思えないほど頭脳を働かせる者たちがいるのだ。

そういった者たちが頻繁に活動を起こすとなると、生徒への被害が出てくるのは当然の事。

そして、見かねた風紀委員が校外での治安維持活動に踏み切ってしまうのだ。

適切な治安維持活動であれば問題ないのだが、そこで過剰な鎮圧活動に出てしまう風紀委員も中にはいる。

それこそが、和讀のように校外での治安維持活動に憧れた者たちである。

「……適切な鎮圧活動ってのはできないものなのかなあ……」

その点において、和讀は適切な処置をしている方であった。

能力者ではあるが書庫バンクさえ見なければ彼を能力者だと信じる者はそういない。それは彼の能力の特徴に原因がある。

フューチャーヴィジョン

彼の能力、『未来知覚』は能力者自身に未来を見せる能力である。現在を見る一つ目の視界と、未来を見る二つ目の視界を両立する事により、現在見えている映像の未来を予測・演算し、未来をシミュレートするというのがその能力の正体である。

つまり、見えている未来というのは能力者自身、つまり和讀にしか見えず、それを証明する手順というのは少々手間がかかる。

そのうえ、彼の強度では数秒先が限界であり、他人からは少々勘が働く程度にしか見えないのである。

尚、超能力者であれば樹形図ツリーダイアグラムの設計図級の予測演算能力を持つとされている。

だが、この種類の能力者のこれまで存在していた最大強度は異能力者ル2までであると発表されている。

そして、樹形図の設計図によつて『未来知覚』の強度を上昇させる方法は不明という予測演算が出たために、この貴重な『未来知覚』能力者はあまり実験には参加させられていない、という実情がある。そのため、和讀は他の能力者と比べ、自由な時間が多くなり、風紀委員となつても非番の日は本当に自由時間となつている。だからこそ、和讀は風紀委員になろうと思つたのだが。

閑話休題。

とにかく、そういう事もあり、彼の鎮圧方法は極めて単純。相手の攻撃を能力を用いて先読みし、回避または上手く防御して鎮圧用スタンガン及び右ストレートをぶちかます、というものだ。

過剰な鎮圧活動ではなく、その点においては警備員からお墨付きをもらっているほどだ。

だからか、警備員内での知名度はそれなりとなつている。のだが、果たしてそれに意味があるのかと言われれば、ない。

結局、他の風紀委員が武装無能力集団に対し過剰な攻撃を加える事で恨みを買ひ、更なる武装無能力集団の活動を生み出している。そのため、治安の悪化が凄まじく、学園都市の治安維持活動自体の仕組み事態の改革が必須となつているのだ。

和讀はため息をつきながら、歩を進める。

最終下校時刻を過ぎてはいるが、あと二時間程度は学園都市内の店が開いている。学園都市内にて一人暮らしをしている和讀は食料を買ったためにスーパーへと向かおうとした、その時だった。

「おい！ 何してくれとんのじゃあ！？」

見るからに不良、という格好をした老け顔の男子生徒が、小学生くらいの女の子を脅していた。

どうやら、女の子は彼にぶつかってしまったらしい。もしくは彼が余所見していた可能性もあるが。

だが、女の子はそんな彼に対し恐怖を覚え、何も言えずに目元には水滴 涙が見えた。

「！」

それを目撃してしまった以上、和讀は黙ってはいらなかった。

いつもよりも手早く携帯電話を取り出し、警備員の詰め所の電話番号を高速でプッシュする。

「もしもし、風紀委員の碓巳です。第七学区セブンスミスト近辺にて非武装と見られる武装無能力集団が小学生らしき女子生徒に対し恐喝行為を行っています。女子生徒の安全を確保するため、こちらでも鎮圧活動を行います。よろしいですか？」

『こちら警備員の だ。確認するぞ。武装無能力集団は一人か？そして、本当に非武装なのか？』

「……周囲に隠れている可能性を考慮しなければ、非武装かつ一人と思われず。とりあえず、女子生徒を危険にさらすわけにはいきませんので、応援がくるまでは僕が鎮圧しますよろしいですか？」

『こちらとしては面子丸潰れになりかねないから、だめだと言いたいが、君の言う事ももつともだ。鎮圧を許可する。勿論、応援をすぐに寄越すから、応援が来たら引き継ぐ事。わかったね？』

「了解。それは、鎮圧活動を開始します」

そう言って、通話を終了し、現場へと直行する。

「おい」

女子生徒はその声で顔を上げた。

“風紀委員”の腕章をつけた中学男子が、彼女と目の前で自分を脅していた不良の間に割り込み、不良を睨んでいるのが見えた。

「なんだあ、テメエは……！？」

「風紀委員だ。恐喝の現行犯で、確保させてもらおうか。もし、抵抗するのなら 容赦なく鎮圧する」

「はっ、何かと思えば風紀委員の真面目ちゃんかよ。俺がその程度の脅しに屈するとも思ってたか！？」

そう言つて、不良は彼女の目の前から風紀委員に向かって殴りかかる。

移動の勢いもあり、その攻撃力の高さは彼女にも想像してきた。危ない、と思ったその時 風紀委員の身体がゆらり、と傾く。

やられてしまったのか、と彼女は思ったが、その直後、不良の身体がぐらりと傾いた。

「！？ て、テメエ、何で避けれたんだ！？」

「教えるとも思っているのかな？ そもそも、君がそういう犯罪行為をしてしまった以上、こうなる事くらい予測してしかるべきだ。勿論、こういった事をした時点で、君はアウトなんだけどさ」

「チ、チクシヨウがア！ 風紀委員なんかやっている真面目ちゃんに何がわかるってんだよ ツ！」

再び、不良は風紀委員へと殴りかかる。

それを風紀委員はひらり、と避けながら右拳を引き、それを思いつきり不良の頬に向けて叩きつける。

「わからないね。いくら才がなかるうと、他人に迷惑をかける君たちの考えなんて、わかりっこないさ」

不良は後ろに吹っ飛び、その口が切れ、出血している。

風紀委員の右手はその血がついたのか若干赤く染まっていた。

そして、不良はよろめき、倒れた。見るからに意識は失っている

ようだった。

彼が気絶しているうちに、風紀委員はポケットの中から簡易手錠を取り出し、不良の手にそれを装着した。

「午後六時三十二分。恐喝行為の現行犯で簡易確保。警備員の到着を待つ」

その鮮やかな手際に彼女が不良に絡まれていたのを見物していた通行人が拍手をした。

それを見て、彼女はゾクリとした。

もしも風紀委員が来ていなければ、まだ絡まれていたのか、と思うと

「大丈夫だったか？」

急に声が聞え、彼女はハッと顔を上げる。

「あ、は、はい……」

「それはよかった。間に合わないかと思ってヒヤヒヤしたよ」

風紀委員の顔は安堵の表情を浮かべていた。

自分を助ける事ができた事に満足しているのだと、彼女は気づいた。

「これから、一応状況確認をしないとけないから、取調べにも着てもらうけど、いいかな？ どの道このまま帰すのも危険だし、警備員の人に寮まで送ってもらう事になるけど」

「あ、はいっ！ と、ところでっ、な、名前っ！ 教えてもらえませんかっ！？」

「ん。僕の名前？ そんなもの知ってどうするのさ。まあ、いいや。僕の名前は碓巳和讀。見ての通り、柵川中学の生徒で風紀委員さ」

女子生徒の救出、という名の不良の鎮圧活動とその後の事務処理を終え、和讀は帰途についた。

「はあ、結局スーパーに行けなかったな……」

事情はどうであれ、風紀委員にも関わらず校外での治安維持活動

をしたのだ。

事前に警備員に連絡をしたため、始末書の枚数はかなり少なかったものの、取調べ等での時間は結構とられていた。

警備員の詰め所を出た頃には時計は既に十九時四十七分を指していた。

そこから最寄のスーパーまでは走っても十五分かかる。その頃には既に閉店だ。

「……でも、ま。サービス残業無償奉仕まがいな行為でも、こういう校外の治安維持活動なら、文句ないかな」

自己満足だと言う事は彼はわかっていた。だが、それでも。

自らの憧れていた校外の治安維持活動によって、一人の少女を救う事ができた、という事実は彼に満足感を与えていた。

「さて、と。帰りますかね」

自宅にある食料はごく僅か。まともな夕食は作れないだろうが、彼には関係がなかった。

今の彼は、普段よりも満ち足りている。

食事がどうであろうと、文句の一つや二つ、奥にしまい込んでおく事ができる。そういう状態だったからだ。

尚、コレは余談だが。

夕食を摂ってから、翌日の朝食の分を考えてなかった事に彼は気づき、結局、翌日の学校にて昼休みに食堂に行くまで机に突っ伏している姿が友人たちに目撃された。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.

01：無償奉仕（後書き）

と、いうわけで。

どうも、YBFです。普段は遊戯王GXの二次創作と高校野球の一次創作などなどを書いている小説家志望の高校三年生です（2011.11.11現在）

そんなこんなで、なんか想像（妄想ではない）してたら、書けちゃったので、投稿してみた次第です。

遊戯王GX二次創作のほうもあるので、更新はそっちがメインですが、チマチマと更新して完結まではいきたいかな、と。

とりあえず、今回はこの辺では。

追記

2011.11.12

稲井咲美、第一七七支部所属 柵川中学の風紀委員、と変更。

02：愚か者を排除せし者

武装無能力者集団。

学園都市にて無能力者と判定された生徒たちによって構成された武装集団。

しかしながら、武装と言うのは名ばかりであり、一般的には不良やチンピラなどの代名詞とされている。

路地裏に佇みながら、和讀はため息をついた。

足元には改造制服をきたリーゼント頭の生徒が五人ほどいた。

彼らは不良　学園都市的に言えば武装無能力者集団だ。

「無差別に攻撃を仕掛けるとか……それだから孤立するんだ。武装無能力者集団……」

彼はなぜこういう状況におかれたのか、というと。

単に武装無能力者集団がたまたま通りかかった和讀に対し襲撃を仕掛け、それを和讀が返り討ちにしたら、というだけの事である。

これがもし、何の力を持たない　無能力者であつたならば。

彼らは同じ状況に置かれた仲間すらも襲撃していた、という事になる。　いや、それはもう既に過去に行われた事があつた。

無能力者が、無能力者を襲う。

元々は無能力者が、能力者を憎んだために組織された武装無能力者集団。それが無能力者を襲うようになってしまった今、既に武装無能力者集団の存在意義がなくなってしまうっている。

「……誰からも孤立した、哀れなヤツらだよね。君らは」

そんな事を呟きながら、和讀は警備員の到着を待った。

02：愚か者を排除せし者

昨今の学園都市の治安悪化は著しく加速し、被害者の総数は全学生の三割にのぼるとされている。

その原因の一つとして、一部の風紀委員が規律を乱しているというのがあげられる。過剰な鎮圧活動により武装無能力者集団の反感を買い、新たな事件を起こす要因となるのだ。

それを未然に阻止するために設けられた新たな決まりとして、規律を破った風紀委員はその地位を退かなければならない、と言うものである。

過剰な鎮圧活動を阻止する事で、治安をよくしよう、と風紀委員の上層部は考えたのである。

だが、それは成功しなかった。

そうやって過剰な鎮圧活動を行い、風紀委員の座を追われた者たちが集まり、独自に武装無能力者集団を取り締まる運動が盛んになってしまったのだ。

『フルリムバー
愚か者を排除せし者』。

それが彼らの名前だ。

武装無能力者集団による犯罪を認めず、治安を維持するためには武装無能力者集団を徹底的に排除し、そのためには能力や武器の使用を躊躇わない。

風紀委員による過剰な鎮圧活動をさらに過剰にしたものであり、この活動によって武装無能力者集団はさらに活動を活発にしていた。

愚か者を排除せし者には風紀委員の腕章はつけられていない。つまり、一般の生徒との違いがわからない、という点において武装無能力者集団たちは対応に困っていた。

故に、彼らはよりいっそう、無差別になってしまったのだ。

能力者に見えれば即攻撃。武装無能力者集団は愚か者を排除せし者の影におびえた結果、愚か者を排除せし者の味方を作るような事をしてしまったわけだ。

そんな現状において、風紀委員である和讀はため息をつかざるを得なかった。

この前の武装無能力者集団による襲撃も、本来は愚か者を排除せし者に対するものであり、つまり愚か者を排除せし者がいるせいによるとばつちりを彼は受けたのだ。

「……全く、嫌なもんだなあ……」

さらに言うならば、相手が無差別でなかったとしても、彼が狙われる理由は十分にある事だった。

風紀委員の中では模範的である彼ではあるが、それでも正当防衛にて無能力者武装集団を鎮圧した事は幾度もある。それに加え、愚か者を排除せし者に対しても鎮圧した事がある。

愚か者を排除せし者と無能力者武装集団。その二つの組織から狙

われる可能性を持つ彼は、路地裏にあまり近づかないようになっていた。

「こついうのを取り締まるために風紀委員になつたはずなのになあ……」

多勢に無勢。やはり、彼が模範的な風紀委員であつたとしても、数にはかなわない。それに、原則として風紀委員は校外での鎮圧活動を禁止されている。

犯罪者へと立ち向かうのは正当防衛時のみ。それ以外は警備員がやると決まっている。それをきっちりと把握している和讀は必要以上の鎮圧活動をしないようにしている。

故に、やはり本来の志とは違う事ばかりをしなければならぬ現実、和讀は唇を噛むしかなかった。

「おい、和讀！」

声が聞えた方向を和讀は向いた。そこには彼のかつての同僚がいた。

「……なんだ。鉄川か」

正真正銘の柵川中学のエース、鉄川一也。てつかわ かずや柵川中唯一の強能力者であり、元風紀委員。

長点上機学園の高等部への進学を目標にした受験勉強に専念するために風紀委員を途中でやめてはいるものの、このままであれば柵川中生徒では初の快拳となる。

「いや、ちよつと息抜きしようと思つてさ。長点上機学園を目指して勉強に専念してるけどさ、まあ、勉強って正直苦痛だしね」

「そんなものなのか？」

「まあね。……どうだい？ 久しぶりにあの公園に行ってみないか？」

「……公園？」

「ほら。風紀委員になりたての頃、規律に反して無能力者武装集団をよく鎮圧してた、第十学区近辺の公園さ」

和讀にとって久しぶりであつたそこは、かつてほとんど姿を変えていなかった。

第十学区。学園都市中最も土地が安く、唯一墓地が存在する学区。研究施設が多く建設されているほか、廃墟と化した研究施設も放置されたままである。

だからこそ、ここに学園都市唯一のスラムのような地域『ストレンジ』が生まれた。

そんな場所と隣接するこの公園は、無能力者武装集団の溜まり場にうつつけだつた。

誰から見放された第十学区でならば、どんな事をしていてもお咎めがない。第十学区から出なければ、誰もつかかつてこない。

無能力者武装集団の楽園が形成されていた。

だが、例外と言うものは必ず存在する。増長した一部の無能力者武装集団が隣接する第七学区へと襲撃をしかけ、事件を起こす。だからこそ、和讀たちは鎮圧活動に勤しんだのだ。

「なつかしいよな、和讀」

「まあ、ね。……今となつちゃ、苦い思い出だけださ」

鎮圧活動をする度に警備員にしかられる毎日。それでも、彼らは何度も鎮圧活動をすべく駆け巡つたのだ。

ただ、月日は流れ、先輩という立場に立つにつれ、模範的行動を示さなければならなくなり、そのうちそういった事はなくなつていったのだ。

「……なあ、和讀」

「なんだ？」

「無能力者武装集団、許せないよな」

「場合によるな。もともと、彼らは学園都市によって保護されてしかるべき立場だろう。超能力の研究をする以上、無能力者を能力者に帰ることこそが学園都市の成功だろうに」

「違うな」

「え？」

「超能力者を生み出すこと　それこそが正解なんだ。無能力者が学園都市にいる事自体が間違ってる。しかも、無能力者武装集団が能力者に手を出すなんて、許されるわけがない」

急変した彼の様子に、和讀は悪寒を覚える。この主義主張。和讀には聞き覚えがある。

『愚か者を排除せし者』。

「鉄川。生憎だけど、僕は帰るよ」

「……俺の考えを、否定すると言うのか？」

「ああ、否定だ。……そもそも、規律を守らないヤツが何を主張したところで、そいつの意見は聞いてもらえない。自分の意見を聞かせなければ規律を守るべきだ。お前の主義主張は規律を反してる」

「ふうん……とはいえ、こうなった以上、お前を帰すわけにはいかないんだよね。それでも？」

「^{タイム}一対一なら負ける気はしないね」

先ほどまで流れていた友好の空気はそこにはない。敵同士。勝負の空気がそこに流れる。

研ぎ澄まされてゆく感覚に和讀は浸りつつ、予測演算の準備を始める。

『未来知覚』はあくまでも数秒先までしか先読みできない。だが、それを知っているか否かで大きく違う。

かつては同志として共闘した彼らだ。能力の詳細は互いに知り尽くしている。

風が凪ぎ、ブランコが揺れる。

キィ、という音を合図として、この戦いは始まった。

最初に動いたのは一也。柵川中学のエースと呼ばれる実力は確か。唯一の強能力者、というのはかつての風紀委員時代においても十分

に発揮されている。

和也は強能力の『風力使い』^{エアロシューター}を持つ。

風紀委員として規律を破りながらも無能力者武装集団を鎮圧する際には、風力を操りカマイタチでまず足にダメージを与える戦術でアドバンテージをえるのが彼のやり方だ。

だが、それに対するは『未来知覚』の和讀。カマイタチの着弾地点を毎回予測演算し、高い身体能力を生かしてそれを全て回避する。……お互い、腕はなまっていけないみたいだね」

「それはこっちの台詞だよ一也。受験勉強とか嘘だな、お前。……『愚か者を排除せし者』にでも参加したのか？」

「参加？ ハン、そんな生ぬるくないよ俺は。『愚か者を排除せし者』創始者の五人。そのうちの一人が俺さ、和讀。……だから、こんな事もできるんだぜ、かつての戦友」

そう言つて、一也はパチンと指を鳴らす。その直後、和讀は異様な未来を知覚する。

急いで右に横っ飛びし、ソレを回避する。先ほどまでいた場所を炎が焼き尽くす。

「……さすがは『未来知覚』。よく避けるねえ、和讀」

「お前、手下を呼んだ、のか……！？」

「うん。そうだよ。聞けば、和讀は俺らの仲間を何人が、かわいがってくれたみたいだしねえ……こっちの仲間になるなら元同僚のよしみで不問にしてやろうと思ったのに……」

「氣遣つてくれたのはありがたいけど、断らせてもらうよ」

そっぴいなから、和讀は予測演算を続ける。

『未来知覚』の予測演算は大きく分けて二つ存在する。

一つ。視界に移る範囲の未来を予測演算するもの。

これが『未来知覚』の基本状態であり、初期設定だ。この状態が最も予測演算に適している。

二つ。自身の周囲を俯瞰的に捉え、その状態で予測演算するもの。この状態では自分の視界外の未来を予測する事も可能であり、先

ほどのような攻撃にも対処できる。

しかしながら、初期設定と比べて必要な演算の難易度が高い。かなり集中しなければならず、そのような集中力を維持するとすると相当な労力となる。

つまり、和讀に残されている手段は一つ。短期決戦だ。

『未来知覚』による予測は絶対だ。無論、未来を見る事で毎回和讀が未来を変えている以上、その行為をもって彼らの行動が変わるが、それすらも再度予測して対処しきるのが和讀だ。

そうでもなければ、鉄川一也が和讀に対し勧誘を仕掛けることなどありえないのだ。

圧倒的戦闘能力。強度はともかく実践には通用する能力。愚か者を排除せし者に必要な人材はまさしくそれなのだ。強度は関係ない能力を持つて無能力者武装集団を排除する。それこそが愚か者を排除せし者だからだ。

だからこそ、一也は長期戦へと持ち込もうとする。

短期決戦に持ち込まれれば勝機はない。勧誘に失敗したのなら、行動の邪魔をされないように和讀には退場してもらうしか、彼らには選択肢がないのだから。

それすらも予測できる いや、予測するまでもない和讀であるが、長期戦を短期決戦に切り替えるのは困難であった。

多勢に無勢。さらに相手は能力者。普通に考えて、勝ち目はない。それでも、和讀は立ち向かうしかなかった。

かつての同僚が道を外れたのなら、まずソイツを殴る。そう決意し、取り巻きの一人の攻撃を完全に回避しながら一人を殴り飛ばす。

一人、二人と減っていく取り巻き。しかし、まだまだ大勢いる。倒してもキリがない。延々と沸いて出てくる愚か者を排除せし者一人一人の実力もあり、それが大勢となれば、その戦力は非常に高

いものだと理解できる。

これだけの人数。これだけの実力。

それさえあれば、第十学区を完全に制圧する事など容易。あるいは、学園都市から無能力者武装集団を根絶やしにする事すらも可能かもしれない、と和讀は思った。

だが、それは同時に、危険な事でもあった。

人数の多い組織というのは、瓦解する可能性があるのだ。

トップと食い違う末端の人物によって、愚か者を排除せし者がただ無能力者であるという理由だけで生徒を襲うような組織に生まれ変わってしまうとしたら。

その可能性は十分にありえる。だからこそ、和讀はこの困難へと立ち向かう。

新たな治安悪化の原因となっている、そして、これから治安悪化の原因を撒き散らしてゆくだろうこの組織に、立ち向かうしかないのだ。

一人、また一人と減っていく戦力に、一也は再び和讀への評価を改める。

前に彼らがコンビを組んでいた頃よりも戦闘力が向上している。

相手を倒すために強力な一撃を急所に確実に決める正確かつ驚異的なパンチ。

能力を行使する事で相手の攻撃を確実に回避するという防御力。攻撃と防御。

その両面において、和讀は一也の知っている頃よりも遥かにレベルが上がっていた。

それに対し、一也は舌を巻くしかない。

だが、これは一対多。

一対一であれば、一也は負けていただろう。

その事実には一也は唇を噛む。が、それは関係のないことだ。この場においては、和讀を倒す事が先決なのだ。

一也が合図を送ると、三人が和讀に対し、突撃をしかける。勿論、それが予測できない和讀ではない。対処する。

だが、そこから何度も複数人が包囲しながら突撃を仕掛ける。これにより、和讀は常に俯瞰的に予測演算をする事を強いられる。そして、それは和讀の消耗が目的だった。

しかし、その目的を知りつつ和讀は対処するしかない。そうでなければ、突撃に対処できず、袋たたきにあうからだ。

しかし、ついに集中力が途切れる。

その様子を見た一也がさかさずカマイタチを背後から放つ。

俯瞰的に予測演算をできない和讀にそれを予測する力は残されていない。直感をもってして振り返るもそれは既に回避不可の距離に迫っている。

直後、和讀の足から朱い液体が流れる。

血だ。

「……っ」

痛覚を刺激され、和讀は苦悶の表情を隠し切れず、声も漏れる。言葉にならない痛みが和讀を襲う。

「どうだい。俺のカマイタチの威力は。……痛いだろう？ これをもつてすれば愚か者を排除せし者は学園都市の害である無能力者武装集団を排除できる……！」

笑みを漏らしつつ、一也は和讀に迫る。

「それでも、仲間になるつもりはないのか？」

「……っ……ないっ！」

「そうかよ。じゃあ、ここでもっと痛い目にあいなっ！」

そう言って、一也が再びカマイタチを出そうとした、その時だっ

た。

バイクのエンジンの音が、公園に鳴り響く。

「なんだ！？ 無能力者武装集団か！？」

「無能力者武装集団は無能力者武装集団でも、俺らの事を忘れたとは言わせないぜ」

そう言っ、現れたのはバイクの群れ。

そして、隊列の先頭にいるバイクに乗っている、ライダージャケットを着たりーダーの風格を持つ男がゆっくりとバイクから降りながら口を開く。

「俺たちは『ビッグスバイダー大蜘蛛』！ この前の事を忘れたとは言わせないぜえ

……！」

T o b e c o n t i n u e d

02：愚か者を排除せし者（後書き）

とりあえず、第一話だけ、つてのも味気ないので更新。
どうも、YBFです。

不定期更新って事は早い更新でも問題ない……よね？

……まあ、次回の更新はこれで未定になりましたけどね（え
では。

追記

2011.11.13

誤字修正

03：大蜘蛛（前書き）

ビッグスパイダーのキャラクターはこんな感じでいいのだろうか。特に、黒妻とか凄く心配。これで合ってるのだろうか。

とりあえず、俺の中の黒妻はこんなキャラという事で、よろしくお願いします。

では、本編をどうぞ。

03：大蜘蛛

「俺たちは“ビッグスバイダー大蜘蛛”！ この前の事を忘れたとは言わせないぜえ……！」

和讀にとどめをさそうとした一也たちの前に現れたのは、バイクに乗った武装無能力集団たち。やはり、武装とは名ばかりであり、所謂不良と言うヤツだ。

その名も『大蜘蛛』。

「……っ……お前らは……！」

「そう、あの時にアンタらとやりあって、分けた武装無能力集団こそが俺たちだ。……さーて……行くぞお前らっ！」

「おおっ！」

そう言つて、バイクから飛び降りて愚か者を排除せし者たちへと向かってゆく彼ら。

その全員が無能力者。しかしながら、その人数は多い。

圧倒的な質には圧倒的な量で対抗する。

それが、無能力者の対能力者用の一般的交戦マニュアルである。

だが、彼らは一人でも十分な実力を持っていた。

恫喝などではない、純粋な喧嘩でその地位を確立し、武装無能力集団のなかではそれなりの知名度を誇る大蜘蛛のメンバーたちが実力で劣るわけがない。

事実、無能力者同士の喧嘩では、彼らは負けナシなのだ。

つまり、愚か者を排除せし者が武装無能力者を狩る者だとすれば、彼らは最強の無能力者たちなのだ。

だからこそ、彼らは向かって行った。

戦力差があっても、突っ込んでゆくのだ。

自らの力が、どこまで通用するのかを知るために

03：大蜘蛛

「おい、大丈夫か？」

フラフラな和讀に対し、そう言ったのは大蜘蛛のリーダー格の男だ。その傍らには赤いライダージャケットを着た女子生徒もいる。

「……まあ、なんとか僕は大丈夫だ。ところで、お前たちは？」

「俺は大蜘蛛の黒妻綿流^{くろつまわたる}。大蜘蛛のリーダーだ」

和讀は大蜘蛛、と言う名を聞くと同時に目を大きく見開いた。

大蜘蛛。武装無能力集団でも十分な知名度を誇る組織。

喧嘩の強さが広まっており、一部の風紀委員からは関わりたくない武装無能力集団ナンバーワンに輝いている。だから、和讀は驚くしか出来なかったのだ。

「まさか、あの大蜘蛛に助けられるとは思いませんでしたよ。……まあ、一番の驚きはアイツが愚か者を排除せし者の創始者の一人だ

った事ですけどね……」

「アイツ……？　もしかして、あそこの風力使いか？」

「ああ。アイツが鉄川一也。愚か者を排除せし者の創始者の一人であり、かつての僕の相棒だった男だ。……頼む。アイツだけは僕にやらせてくれないか？」

「……？」

「ケジメをつける。前は一緒に、ここで規律に反しながら武装無能力集団を取り締まってたからな。今思えば、あの時にアイツを納得させられればよかったんだ。でも、できなかった。……だから、アイツは俺が取り締まる。風紀委員として」

「そうか。それじゃあ、まわりの掃除は俺らに任せろ。トリを取れねえのは残念だけだな」

「……了解した。でも、僕だって意地はあるからな。トリ以外にも狙っていくぞ」

「どうやら、大丈夫そうだな。さて、俺も行くとするかつ！」
そうして、和讀は姿勢を直し、近場の敵に照準を定める。そして、トリガーを引くかのように右拳を思いっきり相手に叩きつける。

一撃は健在。それこそ、鎮圧に長けている碓巳和讀の本領。

だが、黒妻も負けていない。

高い身体能力を生かし、跳躍するとそれと同時に敵にリアットをかましつつ、近場の敵には蹴りをプレゼント。着地と同時に二名が昏倒する。

その様子を敵が恐怖するも、それを確認するや否や、恐怖したものに對し拳が飛んでくる。一人、二人と地に伏して行き、その数は徐々に増えてゆく。

圧倒的戦闘力。

その言葉は、この黒妻綿流に相応しかった。

それでこそ、武装無能力集団のなかでも珍しく純粋な喧嘩でのみ地位を確立した大蜘蛛のリーダーである。

そして、その黒妻と一緒にいた少女も、襲い掛かってきた者の攻

撃を器用に避け、攻撃の直後で隙のできたところに護身用のスタンガンを当てる。

それによって、さらに生じた隙を大蜘蛛のメンバーがしとめる。単なる不良の集まりとなり、協調性の欠片のない集団となりやすい武装無能力集団としては異例のチームワーク。

だが、それを可能にしているのはやはり、一緒にバカなことをしたいという願望が彼らを繋ぎとめているからだ。

大蜘蛛という集まりは、自分が自分らしくいられる　そんな場所となっているから。

和讀には、目を輝かせながら愚か者を排除せし者たちに迫る彼らは、ここにいる誰よりも輝いて見えた。

いつまでもこうしてちゃいられない。

そう思った和讀は、一つの人影を探す。

鉄川一也。かつての同僚であり相棒。

そんな彼に、自らが制裁を加える事でケジメをつけよう　彼は

そう思つて、一也を探していた。

そして　いた。

「……よお、鉄川。これでやっと一体一タイムマンだな」

「……！」

大蜘蛛の一人を倒し、息を切らしていた一也は和讀が近づいていることに気がついていなかった。声をかけられて初めて気づき、驚愕の表情を浮かばせる。

カマイタチで足を負傷していながらも、数名の敵を倒しつつ、ここまで歩いた気力と体力。

勿論、本来の実力を発揮できない状況ではあるものの、一対一における鎮圧能力に関して言えば和讀は一也を上回っている。

それは、先ほどまでの戦闘が物語っている。

今更確認するようなものでもない。

故に、一也には、和讀に勝つ手段は一つしか残されていない。

たった一人で長期戦に挑む事。短期決戦であれば、未来知覚に捉えられカウンターを決められるか、高い身体能力を生かした強烈な一撃を決められてしまう。

だからこそ、残りの体力から考えて、長期戦に持ち込めばまだ疲労しきっていない一也の方が有利なのは明確だ。

だが、それは困難を極める。

全方位からの波状攻撃こそが最適な手段であり、一対一でそれを再現する事など、一介の『風力使い』である鉄川一也には不可能だった。

しかしながら、あくまでも困難を極める、というだけだ。なぜならば、先ほどのように波状攻撃を裁いていた頃と違い、和讀は既に手負い。

能力を行使できたところで、回避できるかは定かではない。

そもそも、だ。『未来知覚』は非常に困難な演算式をたてる必要がある。

負傷し、集中を維持しづらい環境にある和讀が冷静に能力を行使できる保障はどこにもない。

それどころか、再び能力を行使する事で再び集中力を欠き、再び攻撃をくらう事になるかもしれない。

そういった要因を鑑みれば、一也の状況も、あまり悪いというわけではない。

むしろ、和讀の方が深いダメージを負っている今、一也にとってはチャンスとも言えた。

だからこそ、一対一が成立する。

互いにとってチャンスでありピンチ。

一瞬で有利と不利が入れ替わる。

勝敗も、一瞬で決まる。

近くで愚か者を排除せし者の一人が倒れ、地に伏す。
その音を合図にして、この戦いは始まる。

最初に動いたのは和讀。

未来知覚を持つている以上、一也が最初に動くのは愚の骨頂。
故に、和讀から動かなければならない　　が、能力をきちんと行
使できる保証などどこにもない。

演算する力は普段よりも劣る。

無能力者クラスの演算力で未来を描けるかどうかはもはやランダムだ。

数瞬後を演算するか、あるいは意識的に発動する事が不可能とな
っているか。

それは神のみぞ知る、ランダム要素。

しかしながら、その状態でも和讀は臆せず一也にむかって駆けて
行く。

元々、和讀は無能力者であつた。

未来知覚こそあれど、狙って能力を発動する事すらも困難で、見
れても数瞬、あるいは数秒しか見えない。使い勝手の悪すぎる能力
しかなかった。

だが、彼はその頃からこのあたり　第七学区と第十学区の境
で一也とともに鎮圧活動に明け暮れていたのだ。

素の身体能力の高さなら一也に負けるはずはなく、また、能力が
なかりうと、直感は働く。

一也と長い間ペアを組んでいた頃の事を思い出しながら、一也の
行動を読めば能力はいらない計算となる。

それに、賭けるしかなかった。

対する一也は和讀の移動先にカマイタチを設置する。空間を風が
凧ぎ、和讀を襲う。

純粹な疲労のみである一也にとって、カマイタチの生成は苦では
ない。

だが、疲労による集中力の低下はカマイタチの切れ味の低下や命
中精度に影響を及ぼす。

当てるはずのカマイタチが若干ズレ、その結果、和讀に避けられ
てしまう。

「ちっ、もう一発だっ」

第二刃。

これは同時に二つのカマイタチが和讀を襲う。

だが、それに対する和讀の行動は、一也へと一気に迫る、という
博打じみたものだった。

だが、それが二つのカマイタチの僅かな隙間を潜り抜ける事
に繋がった。

「な、に　！？」

「歯を食いしばれ、鉄川。正しい事をするのなら、規律を遵守しな
きゃならない。規律を破ったヤツに、正義を名乗る権利はないんだ」
「く、くそがあああつ！！」

叫びながら、一也は再びカマイタチを生成する。その数、五つ。

それが、あらゆる方向から和讀を狙う。　だが、駆けている和
讀はそれすらもかいくぐり、一也の懐へと侵入する。

その距離、僅か一メートル足らず。

「残念だった。鉄川。……また今度、風紀委員として真面目にやる
う」

そして、和讀は右拳を一也の左頬に突き刺さり、一也は吹っ飛び、
倒れた。

フラフラとしながらも和讀は一也の所まで歩き、そこで倒れる。

「……おい、大丈夫か風紀委員」

大蜘蛛のリーダーである黒妻は、倒れている和讀に声をかけた。
むき出しの上半身には背中の大きな蜘蛛の刺青と無数の傷跡があった。

他の大蜘蛛のメンバーも動きを止めている、という事は愚か者を排除せし者を全滅させる事に成功した、と言うわけであり、それに気づいた和讀はほっとため息をついた。

「あ、ああ。大丈夫だ。……結構、マズいけどな」

「そうか。……ところで、名前、なんて言うんだ？」

「僕は和讀。　碕巳和讀だ。柵川中の風紀委員をやらせてもらってる」

「なるほど。お前、『未来知覚』か。知ってるよ有名人」

「知っているのか……？」

「そりや、知ってるさ。“風紀委員一模範的な男”碕巳和讀。噂には聞いていたが、お前みたいなヤツだとは思わなかったぜ」

「それはこっちの台詞だ大蜘蛛。同僚からは手をつけられない、つて言われてたけど、話してみれば、どの武装無能力者集団よりも話しやすいんだな。……勿論、規律を破った風紀委員よりもな」

「……なるほど。だから“風紀委員一模範的な男”なのか。……と言っ事は俺らも捕まえるか？　一応、暴行の罪で俺らを捕まえられと思うが？」

黒妻はそう言って、和讀の目の前に手を出す。その行為に周囲の彼の仲間たちが凍りつく。

だが、彼らが予想した出来事は起こらなかった。

「今日はよそう。……こっちも疲れた。それに、今日は恩人だからな。たまには見逃し立って罰は当たらないよ。多分」

「“風紀委員一模範的な男”じゃないのか？」

「それはそれ、これはこれだ。……それに、今の僕にあなた方を捕まえられだけの実力はない」

「……そういう事なら、俺らはそろそろ退散させてもらうぜ。……警備員の車のサイレンが聞えてきたしな」

「急いだ方がいい。多分、誰かの視界に入って、通報したんだろ。連絡があるまで動かない警備員だけど、この時間帯なら連絡直後に来るからな。……捕まるなよ」

「言われなくてもな。お前ら、帰るぞっ！」

「おうっ！」

そう言って、彼らは公園を去ってゆく。戦いの最中に倒れたメンバーも運んで。

そして、その場に和讀は倒れた。

最初の一也による一撃が未だに彼から体力を奪い続けていた。

「……限界か……」

立つ事はできない。そのまま視界が黒くなってゆく。

サイレンの音が徐々に小さくなり、そして、彼の意識は飛んだ

気がつけば、彼の視界に移っていたのは白い天井だった。

「……ここは……？」

「和讀！ 気がついたの！？」

状況を確認しようと彼は上半身を起こす。すると、それを見た彼女 稲井咲美が彼に話しかける。

「稲井？ 僕は、一体……？」

「よかったあ、よかったあ……っ！」

「お、おいっ！ イタタタタ！ 痛いって！」

ぎゅっ、と抱きしめられ、痛がる和讀。だが、咲美は力を抜こうとしない。

「……だつてえ……っ、危険な状態、つて……医者が言ってたんだよ……！ 心配したんだぞ！」

「……ごめん」

和讀は、覚えている最後のシーンを思い出す。

あの時、和讀は確かに一也に一撃を当てていた。だが、あれはただの賭けであつた。

その前のカマイタチ。あれをよけたのはただの偶然に過ぎない。あの時の彼には、未来知覚を使うだけの演算力が残されていなかった。

つまり、懷にもぐりこめたのは偶然。一步間違えれば、死ぬ可能性もあつたのだ。

「……と、いうか。稲井。お前、真面目な顔もできるのな……」

「……バカ。普段はオタクなアタシでも、真面目な時な真面目なんだから……」
「……つたく、失礼ね」

そついいながら、咲美は手で目元の涙を拭つた。

「さて。とりあえず、アタシを心配させたから、今度何か奢つてくれない？」

「……え？」

「だって、心配させたんだよ？」

「え、いや、それ、関係あるのか……？」

「あ・る・よ・ね？」

「……エエ、アリマス。スイマセンデシタ」

「よし、それじゃ、退院したら、連絡して。和讀の携帯に、アタシの番号登録しといたから。じゃーねーっ」

そつ言つて、咲美は病室を去つて行つた。

「……つたく。うるさいヤツだな。いつもいつも」

普段ならイライラする様な事も、今の彼にはそうは思えなかった。怪我の影響か。はたまた彼女の勢いに押されてしまったからか。だが、一つだけ確かな事がある。

今は、休養が一番。

彼はとりあえず、再び目を瞑り、寝る事にした。

尚、これは余談だが。

先ほど去ったはずの稲井咲美が忘れ物に気づき、彼の病室に再び入室、彼を起こしてしまいそこでさらなる騒動があったのだが、それはまた別の話。

その結果、彼の財布に大きな打撃を与えたとしても、別の話なのである。

T o b e c o n t i n u e d

03：大蜘蛛（後書き）

パソコン使用制限がかかったため、更新速度の低下が決定しました。どうも、YBFです。くそ、読書時間にも影響が出るじゃないか！

…！！

遊戯王GX二次創作は絶対にWiki見なきゃダメだし、こっちもある程度みなきゃ、書ける自信ないし。

とりあえず、更新速度は極めて遅くなると思いますが、よろしくお願ひします。
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4261y/>

とある科学の未来知覚

2011年11月24日19時47分発行